

一生在暮中道案内



門 口 仁 9
1629
卷

校友

川牛養五助 寄贈

明治四十二年二月二十日
川牛養五助氏寄贈

校

三升 藏 廿四 卯 辰



天令 我 春 花 光 輝 実 の
人 色 欲 欲 名 聞 欲 迷 天 令 亦 亦
道 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name, possibly reading "John Smith".

此乃道者

句言雅々々々々々々々々々

章たふらかゝる人の思ふところを盲人に

地^へ
小
か
を
も
と
に
て
く
自^じ然^{ぜん}
と
な
り
ん
ど
意^い不^ふ
信^{しん}
あ
る
儘^{まま}

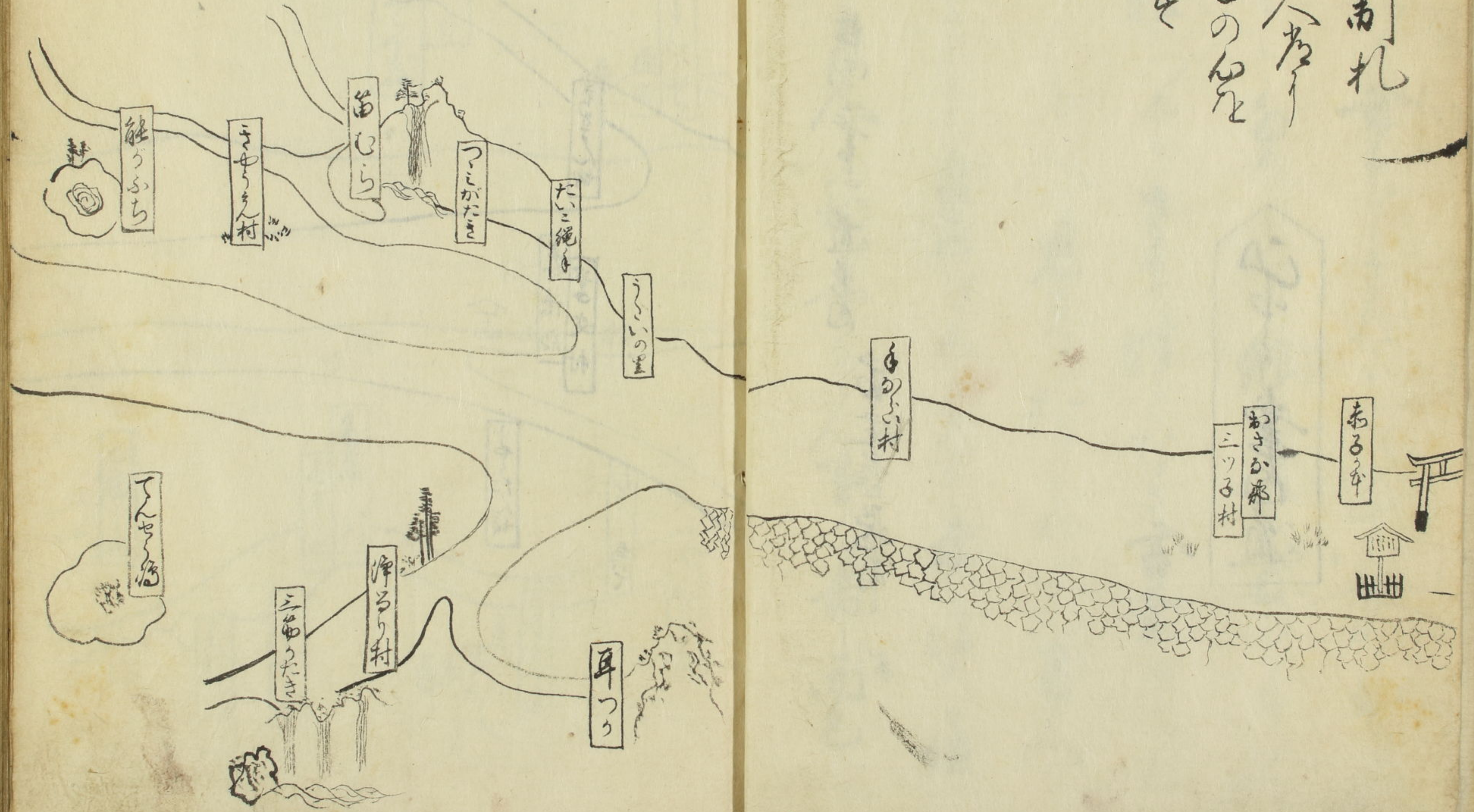
事あるは人のわざなりと書きて

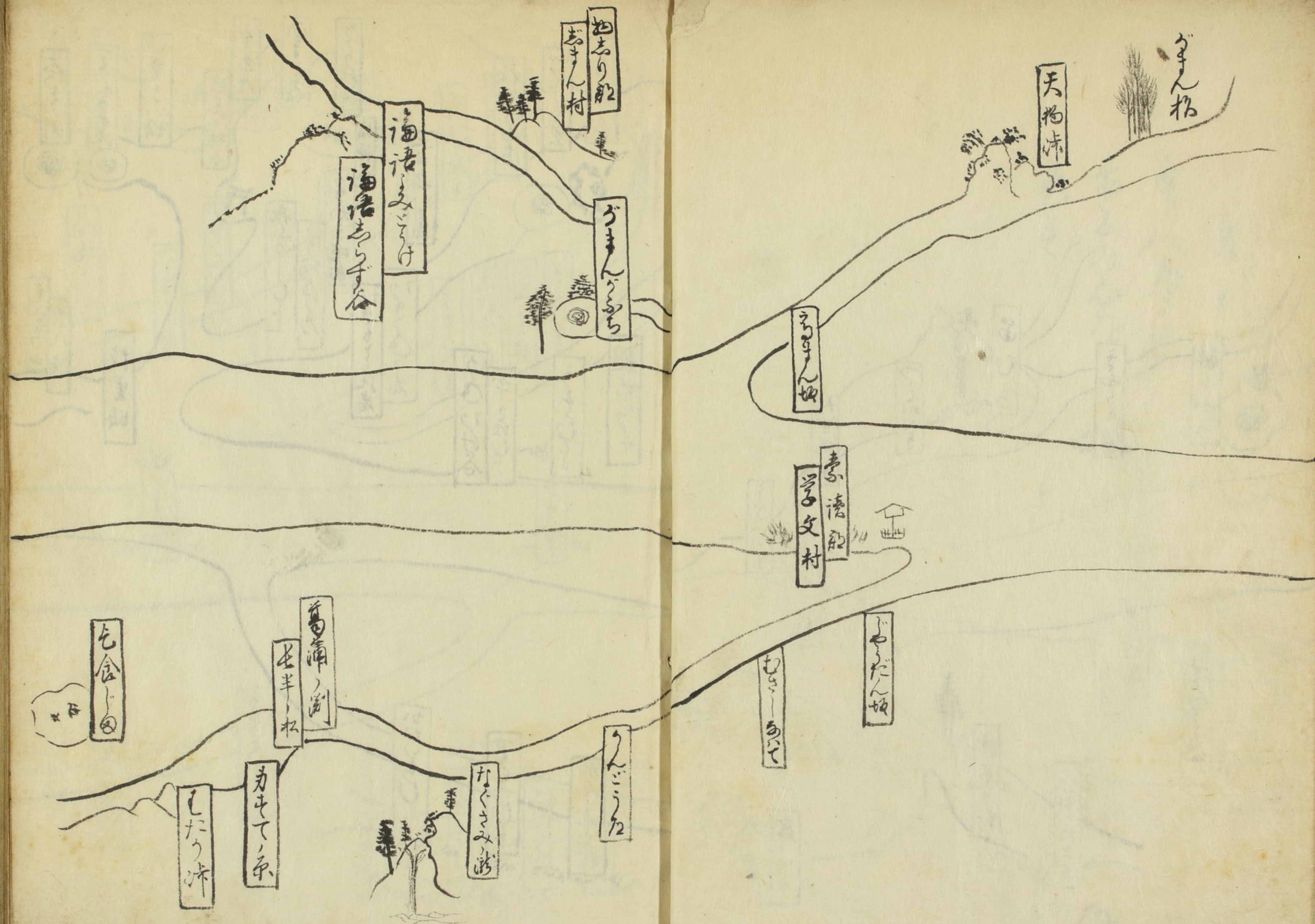
是世之所謂道者也

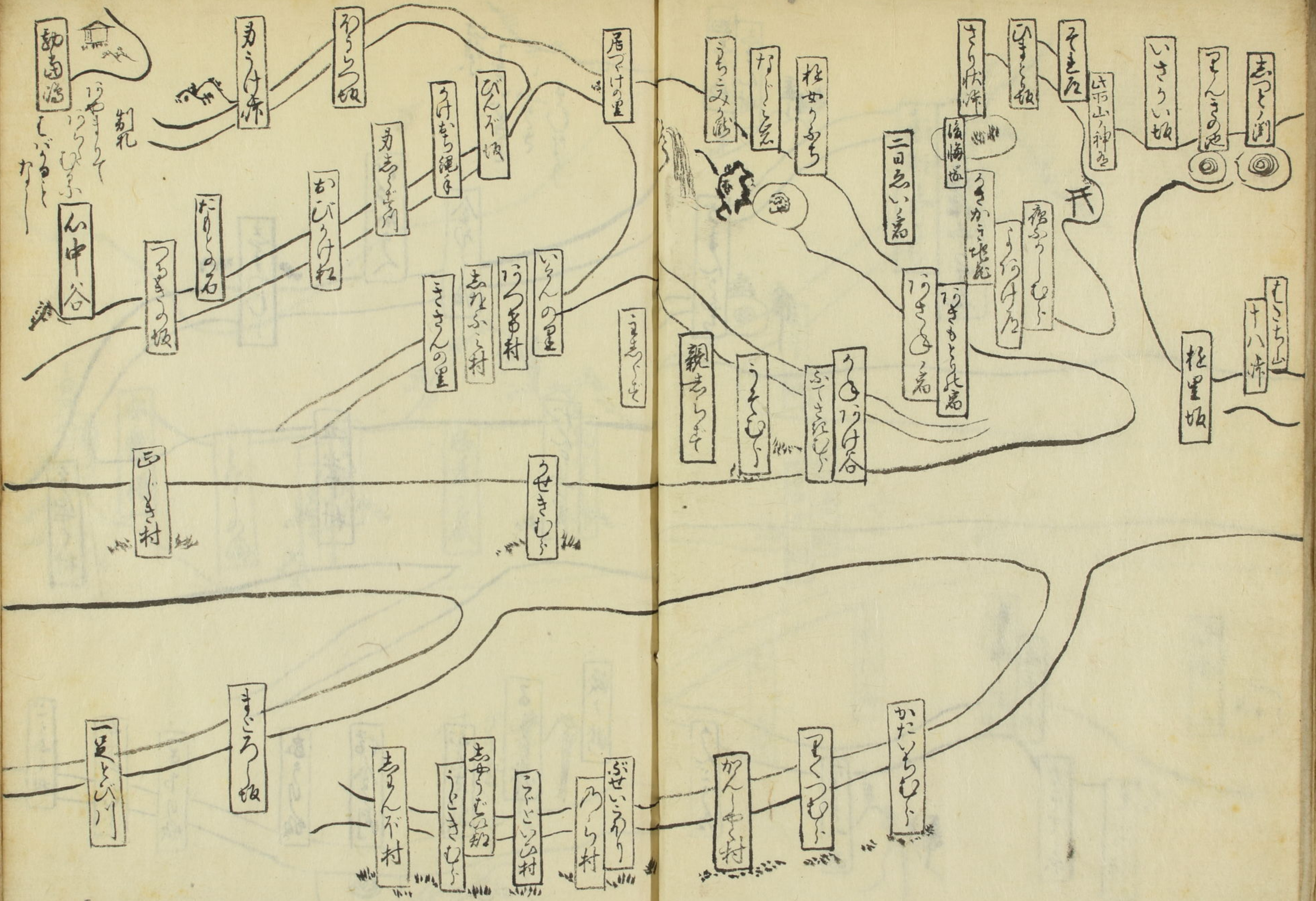
家達堂飛角

平書道

割れ
聖人
赤子の心
失せ







お南

山中谷

西村

一足とび川

力うけ赤

たりの石

ましろ坂

わうら坂

おびうけ坂

力あき坂

さきさの里

あやうどの坂

びんが坂

おなふ村

こどとん村

居たけの里

うきむら

あやう村

こまの里

こまの里

うきむら

柱がうら

うきむら

二日あいの里

うきむら

さうた坂

坂

うきむら

ひまの坂

うきむら

そまの坂

うきむら

はち山神を

いさうい坂

柱里坂

あまの坂

十八坂

あまの坂

十八坂

かんや村

うきむら

かたむら

あやう村

うきむら

こどとん村

あやう村

あやう村

赤子 女

村 春のふききり 船の上のふききり

さしききり ながききり 平等のふききり

まふききり ながききり 村のふききり

見聞え知のふききり 春のふききり 春のふききり

春のふききり 春のふききり 春のふききり

一 道のいづれもふくむ一生命ある二道の交
 へて一生のいづれもふくむ一生命ある二道の交
 へて一生のいづれもふくむ一生命ある二道の交
 へて一生のいづれもふくむ一生命ある二道の交

多川也きりきりし今なき横道曲りて
 心を苦むる大あかき心やまのたまり廣く
 心をひて心の一生きりきり一分は
 んのきりきり

極樂の地獄の佛の生
空の座。

字

世すゝめ人にもあはれ
村の風を業にあはれ

聖村西時風子

正直は人の道に於て村の業

あふくはくし道不浄の村高の晴西風景なりと

是より大志乃るをいふに生

村
中
南
耳
は
道
ふ
の
あ
う

山田の里

はけねむいふ

南親唐
意也

讀書

學文村

特の余計

一、
道
之
事
悟
の
様
子
迷
子

本道山寺古

神儒

道利

[illegible]

福原村 (Fukuhara)

河原村 (Kawabara)

八幡村 (Yatsuha)

村深 (Murafukae)

北村 (Kita)

中道 (Nakamichi)

月見 (Tsukimi)

文村 (Fumura)

明徳 (Meitoku)

常盤 (Toyouke)

清水 (Shimizu)

白根 (Shirane)

の若
 將
 親
 安
 か
 多
 村
 人
 道
 中
 郎

の若
村
集
聞

遠くを家へ来て、今もまだ

金に困る者が、いまだ

来るが如く

何れも虎の如く、猛り

いまだ、蝶の道

西海道

泥を、都田

し、縄

押、ひき、く

高橋の洞

春の雪

ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ

は、は、は、は、は、は

いりなせぬもの

乞食

ふたつたて

かき

けしき

かき

いりなせぬもの

いりなせぬもの

いりなせぬもの

いりなせぬもの

いりなせぬもの

いりなせぬもの

الحمد لله الذي هدانا لهذا
ما كنا لنهتدي لولا أن هدانا الله
والحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين أجمعين
والسلام

والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين أجمعين
والسلام
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين أجمعين
والسلام

東のちをたつとて又長を敵とす

もろ 名金の足利家の事なかなかな

何とある村の事
知れぬ

おひつり
改定
村
ん
の
果
山
部

安樂寺
大分
書

石田山人作

自悟

賢者我之安んずる

王羲之草書

安永村

おのゝきふもわらふ
若の生

利村

村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては

村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては
村の奥にありては

村

信

高

村

名

村

村

村

村

村

村

村

花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて

花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて
花のうらなひをうらなひて

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

今春迄は雨の多かりし村あり

吉田 幸次郎

意のほどに
致す村の風景の

出、やうの^{いけ}林と文の油も屋をへてまゝ火

酒造少吉号村の幸村

金和坊に御免の

江戸の風を知らぬ

たゞ
北道
と
何
ん
か
病
を
か
け
竹
の
居
る
と
の
ま

福の金銀紋をたぐひて我より痛りて懐

わが世をわが世のふらん

風をきく

何名自來亭是也

[illegible]

[Handwritten cursive script, likely a signature or name, written vertically.]

海の幸にや

又我儘に鉄砲の海を

はなすはなすはなすはなす

月夜にや 古き 昔の

しるしにや 昔の 昔の

しるしにや 昔の 昔の

しるしにや 昔の 昔の

しるしにや 昔の 昔の

しるしにや

しるしにや

しるしにや

しるしにや

[illegible]

と淋々今やいふ西の東福の如
きしるも掛案せむじりういのゆゑ
楊言方そこのわいひともて座の揺ゆ
ろくの座の門はあやうく人の常統を
生れ蓋さうかち安んずけつたのけ
もさうなうといふかへんもあ

第
 百
 二
 十
 一
 卷

柱里坂

此後十年十餘年
 始知此世之
 有村莊之風
 有讀書之樂
 有金銀之聲

[illegible]

一、
何
か
門
城
一
父
痛
表

通
華
女
也
乃
花
一
一

(Faint cursive handwriting)

[illegible]

夜半の月影に照らされし
庭の草花は春の風を
感じてはまた花を咲かせ
てはまた花を咲かせ

花屋

花屋の主人は花を愛する人

花屋

花屋の主人は花を愛する人

花屋

花屋の主人は花を愛する人

花屋

朝あさの音おと

船床の石

喘急口苦

二日 碑の石

田
中
宗
兵
衛
尉
の
御
印
鑑

和漢の書

嶋
まへもろとも
起る船席の舟

知不足齋

石子と黄泥

打金

遠近の音は物々草々

五つ子の星

我々も此の如く

力清神

十分の種

又親戚の如く

此の如く

此の如く

杜若

此の如く

此の如く

此の如く

此の如く

此の如く

知 諸 君 之 意 見 亦 甚 爲 可 喜 矣

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

其 中 有 謂 爲 國 計 計 者 亦 有 謂 爲 民 計 計 者

いそ政の本道の大なることいふは

あはれなることいふは

いふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

[illegible]

いんげん

名を以て
にいはるる
梨子の
若女

72

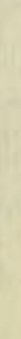
あまのこゝろを
かへしめよ

かきくけこ

陽春集

子子子子子

信長公



今更道々
ものゝ

埋也何者後
西魏

人

此乃
 純
 之
 子
 也

車中合
別居金支

いふはくしん

[illegible][illegible]

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in two columns on a double-page spread. The right page contains approximately 10 lines of text, while the left page contains approximately 10 lines. The script is highly stylized and fluid, with many loops and flourishes. The ink is dark, and the paper is aged and slightly discolored.

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

かきつね

Handwritten text in cursive script, first line of the left page.

Handwritten text in cursive script, second line of the left page.

Handwritten text in cursive script, first line of the right page.

此乃西人
所製之藥
能治一切
瘡毒之症
凡患此症
者宜早服
之無誤

此乃西人
所製之藥
能治一切
瘡毒之症
凡患此症
者宜早服
之無誤

[illegible]

別荘山

史記の二〇〇年か

一〇〇年

石貫村

稲の田に

田の田

之を若くして

家責

林の田

田の田

百貫の田

子責

名をいふ

加美村

村

村

村

士

農田

工

商

正直

直

角

七

子
 奈
 皆
 人
 乃
 偏

(Faint cursive handwriting, likely bleed-through from the reverse side)

かゝいの村

山崎村

狭物村

村の風、仁義礼智の徳を尊ぶ村

村の風、仁義礼智の徳を尊ぶ村

村の風、仁義礼智の徳を尊ぶ村

石居 天

書

村の風、仁義礼智の徳を尊ぶ村

寛安

長崎

山崎

村の風、仁義礼智の徳を尊ぶ村

今更にいふ事あり

福人の位より

五箇條

徳方録

新編親の事

唯の事

孝の事
忠の事
義の事
廉の事

花の王

事

書

も、帆

事、衣、大、大、大

[illegible][illegible]

天竺國之南

日南國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

南越國之南

酒者

其酒之房より出たる酒

武道

其酒之房より出たる酒

神道

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

其酒之房より出たる酒

さきよの佛の心なる所成なる

く虚空一神なりてりつらなるなる

思ひ候ふ

諸行無常是生滅法生滅々已寂滅

為樂

初夜の鐘は音なり
手鼓を候
法夜の鐘は音なり
百は候



梵鐘の音なり
心常なる音なり

入相の鐘の音なり
心常なる音なり

雲信寂滅

心常なる音なり

古く達徳の作ありてなる書を
見よと書つりと思ふにけり
を進めしむる也との旅の
まゝとて思ふなる所なり
とて思ふなり

はるかに新なる櫓の

文化元年の五月日

今世も眼赤く通十二周廻る日室なる古人の
云々も成る釋氏の一念一念に教室候
中の二倍止り法も莫作候と奉行する人
の意も感するにやとて主なる平等の意に
おこるにやとて主なる平等の意に
おこるにやとて主なる平等の意に
おこるにやとて主なる平等の意に

道の徳と作福とと来りて家々に見るは
人の方寸も是れぬ物なり百の罪咎休泊り
名を建首の口を世に生れしものなり
一もふや年の暮れしものなり
かきあはれし一生の休泊しものなり
何れ止むと歩むのちも人なり

の面も人なり
人なり
人の大なる而して神佛の二
神も神合丸一位のめも万病を愈
て命を重かるる

道乐山人
〇

明治二年己巳六月軍

漢河町



川手佐七
席花

